

『国富論』における価値・価格分析の 構造に関する諸見解

——海外におけるアダム・スミスの
価値論についての諸研究から——

中 川 栄 治

序

わたくしは、二つの機会^{*}に、主に今世紀に入ってから海外において発表された諸研究からそれぞれ、『国富論』におけるスミスの価値論の位置という問題に関する諸見解を、また、スミスの価値論のなかに見出される諸価値ならびに真実価格というさまざまな諸概念の意味とそれらの関係ということに関する諸見解を、整理する作業を行なった。スミスの個々の分析の詳細な検討というよりも、『国富論』におけるいわゆる価値・価格分析と

* 中川栄治『『国富論』における価値論の位置に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——』『広島経済大学経済研究論集』第1巻第3号、1978年12月、中川栄治「アダム・スミスの価値論における諸価値および真実価格：語法に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——」『広島経済大学経済研究論集』第1巻第4号、1979年3月（なお、本稿で取り扱う論者の間には、スミスの使用した用語の意味理解に関してかなりの相違がある。それらの点については、この研究ノートを参照していただきたい。また、この機会に、この研究ノートの240ページの、「そしてまた、ブライドンは、スミスにおける『真実』価値を厳密な意味での交換価値すなわちうえにみたようなある所与の時点での相対的な価値とは区別されるべきものとして、把握している。」⁴³⁾という個所を、「そしてまた、ブライドンは、スミスにおける『真実』価値を、厳密な意味での交換価値すなわちうえにみたようなある所与の時点での相対的な価値とは区別されるべきものとして把握し、そしてそれを、いまみた真実価格と同義のもの⁴³⁾として取り扱っている。」に、訂正させていただきたい。

いわれる個所においてスミス自身が、どのような問題を、どのように扱って、議論を展開しているのかという問題に焦点をしばり、この問題に直接的にあるいは間接的に言及している主に今世紀に入ってから海外において発表されかつわたくしが見ることのできた諸見解を、わたくしなりに整理し、スミスの価値・価格論の個々の問題についての検討への準備とすることが、本稿の目的である。

さて、周知のように、スミスは、『国富論』第1編第4章の終りのところで、それにつづく彼の価値・価格分析について、

「人々が、財貨を貨幣と交換するか、または財貨を相互に交換するにあたって自然にまもるルールとはどんなものであるかを、これから私はすすんで検討することにして。こうしたルールは、財貨の相対価値または交換価値とよぶべきものを決定するのである。

「注意しなければならないのは、価値という言葉に二通りの異なる意味があって、あるときはある特定の対象物の効用をあらわし、あるときはその所有から生じる他の財貨にたいする購買力をあらわす、ということである。前者は『使用価値』、後者は『交換価値』とよぶことができよう。最大の使用価値をもつ物が、しばしば交換価値をほとんどまったくもたないことがあり、これとは反対に、最大の交換価値をもつ物が、しばしば使用価値をほとんどまったくもたないことがある。水ほど有用なものはないが、水ではほとんどなにも購買できないし、それと交換にほとんどなにも入手できない。反対にダイヤモンドは、ほとんどなんの使用価値ももっていないが、それと交換に非常に大量の他の財貨をしばしば入手することができる。

「諸商品の交換価値を規制する原理を究明するために、私はつとめて次の諸点を明らかにしようと思う。

「第一に、この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格はいったいなにに存するか。

「第二に、この真実価格を構成し、あるいはつくりあげているさまざまな部分とはどのようなものであるか。

「そして最後に、価格のこうしたさまざまな部分のいくつか、またはすべてを、ときにはその自然率ないし通常率以上に引き上げ、またときにはそれ以下に引き下げるさまざまな事情とはどんなものであるか。あるいは、諸商品の市場価格すなわち現実の価格がそれらの自然価格とよべるものと正確に一致するのをときとして妨げる諸原因は、いったいどんなものであるか。

「私は以上三つの主題を、次の三つの章で、できるだけ詳細、明瞭に説明しよう

と思う。……」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited... by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, New York, 1937,——以下, W. N. と略記する—— pp. 28~29. 大河内一男監訳『国富論』〈全3巻〉, 中央公論社, 1976年, <I>——以下, 大河内訳<I>と略記する——49~50ページ。)

と述べている。¹⁾このような事柄を取り扱くと スミス自身が言明している『国富論』における彼の価値・価格分析が、彼の研究者たちによって、実際にどのような構造をもつものとして、理解されてきたのか。

1) なお, P. ディーンは, 1978年の著書において, 受け入れることのできる価値理論を考案するのに伴う四つの主要な内的に関連する問題として, ①どのようにしてまた何故にある商品が価値を獲得するのかということを説明すること, ②一方でのある商品もしくはサービスのなんらかの内在的, 永続的なものとして考えられる価値と, 他方での, 貨幣もしくははなにか他の商品, サービスのタームで表わされたその商品あるいはサービスの市場価格との間の, 複雑で変わりやすい関係を解きはぐすこと, ③価値理論を所得分配理論に関連づけること, ④操作可能なタームで現実に価値を測定するということ——というのは, もし価値が測定可能でないならば, その理論は検証できないから——をあげ, スミスがこの章句においてこれらすべての問題に直面していた, としている。(P. Deane, *The Evolution of Economic Ideas*, Cambridge, 1978, pp. 23~24.)

なお, 価値理論そのものの本来の課題, 本質等という問題についての E. キャナン, M. ドップ, R. L. ミークの諸見解については, 中川栄治『『国富論』における価値論の位置——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——』『広島経済大学経済研究論集』第1巻第3号, 1978年12月, 103ページ脚注8)を見よ。

I

J. K. イングラムは, 原版が1888年に出版された彼の著書において価値・価格についてのスミスの議論を説明するさい, スミスの議論を以下のような構造をもつものとして把握しているように思える。すなわち, スミスは, 価値という言葉には効用と購買力という二つの意味があり, 一方は使用価値, 他方は交換価値と呼ばれるとし, 彼はこれらのもののうち前者に

については単に記録するだけにとどめて、後者つまり交換価値の研究にすす
み、この交換価値に関する研究において「価値の尺度は何であるか」、ま
た、「他物と交換される一物の量を規制するのは何であるか」という二つ
の問題を考察する。そしてこの交換価値の尺度として労働、貨幣、穀物が
議論され、他方、後者の問題はさらに最初期の社会の段階と進歩した時代
とに分けて考察され、最初期の社会段階では財貨の生産に使用された労働
量とその財貨の「交換価値」を決定するが、進歩した時代では「価格」は
複雑となり、一般的には、賃金、利潤、地代という三つの要因からなると
される。そしてこの進歩した時代での「価格」についての議論には、財貨
の自然価格、市場価格、および、競争・独占とに関連しての自然価格と市
場価格の関係、さらに価格の構成部分としての賃金・利潤・地代について
の議論が含まれている、というものである。²⁾

他方、A.C.ホイッターカーは、1904年の著書において、古典派の諸価
値論は互いに異なり錯綜してはいたけれどもそこには「価値規定の理論」³⁾
と「価値測定⁴⁾の理論」という主要な考え方の系列を識別することができ、
前者はさらにF.フォン・ヴィーザーの用語に従えば、⁵⁾ 価値についての、
「哲学的」説明と「経験的」説明からなっているとし、このような視点か
らスミスの議論を考察するのであるが、ホイッターカーによれば、価値に
ついてのスミスの一貫しない多数の説明は、『国富論』第5章に含まれる
部分と第6、第7章に含まれる部分という二つの主要な部分に分割でき
る、とされる。そして、第5章では価値についての「哲学的」説明がなさ
れ、数量的に価値を支配する価値の規定者としての労働標準つまり商品の
交換価値はその商品の生産に要する労働での生産費用によって支配される
という労働—費用標準が示され、また、単なる価値尺度としての労働標準
つまり労働—支配標準が示され、他方、第6、第7章では「経験的」説明
がなされ、労働—費用標準が放棄され「企業者費用の法則」が示され、他
方それでも、商品の交換価値、所得の「^{レギュレーター} 真実価値^{スタンダード}」はその商品あるいは所
得が支配する労働量によって測定されるとしている、とされる。そしてホ

ホイッターカーは、スミスは現実の生活に適用すべき価値理論としては我々に企業者費用の法則の初期的形態と価値の労働—支配尺度とを残し、労働—費用が市場価格を規定するという純粹の古典派価値理論と考えられるものとの関係を絶っている、とするのである。⁶⁾

- 2) J. K. Ingram, *A History of Political Economy*, (Original edition 1888, this edition first published 1915) reprinted, New York, 1967, pp. 92~95. 米山勝美訳『イングラム著・経済学史』, 早稲田大学出版部, 1925年, 131~135ページ。なお, 比較的最近では, R. リーキャッシュマンが, スミスの議論における尺度を「労苦と骨折りとしての支配される労働」としたうえで, ここで見たイングラムの把握と類似した把握を示している。R. Lekachman, *A History of Economic Ideas*, (1959) first McGraw-Hill Paperback Edition, New York, 1976, pp. 90~92 を見よ。
- 3) なお, ホイッターカーが但書を示しながらここで古典派の学者としてその議論を取り扱っている人物は, スミス, リカード, マルサス, マカロック, J. ミル, トレンズ, シーニアー, J. S. ミル, ケアンズである。(A. C. Whitaker *History and Criticism of the Labour Theory of Value*, <1904> reprinted, New York, 1978, p. 9.)
- 4) F. von Wieser, *Natural Value*, (1889) edited by W. Smart, translated by C. A. Malloch, 1893, reprinted, New York, 1956, pp. xxvii~xxviii.
- 5) A. C. Whitaker, *ibid.*, pp. 9~12. なお, ホイッターカーによれば, この「哲学的」説明 (“philosophical” account) とは, 価値の一般的なぞ, 価値の究極的な性質, 本質に対する古典派の人々の解答であり, この説明における中心的な考え方は労働—費用が(交換)価値の本質であるというものである。それに対し, この「経験的」説明 (“empirical” account) とは, 現実の世界においては商品の交換価値はその商品の生産のために支払わなければならない労働の賃金, 資本の利潤, 土地の地代の合計に等しくなる傾向があるというものであり, これは「企業者費用の法則」(the law of entrepreneur's cost)と呼ばれる原理に相当するものである, とされる。ホイッターカーによる「哲学的説明」および「経験的説明」についてのより詳細な一般的説明については, A. C. Whitaker, *ibid.*, pp. 12~15 を見よ。
- 6) なお, ホイッターカーによれば, 「哲学的」説明は第5章において無条件的に真実であるかのように一般的なタームで述べられているが「経験的」説明がなされるに到るとそれまでに述べられてきたことのかかなりの部分はいわゆる「資本の蓄積と土地の占有にききだつ初期未開の社会状態」に限定されるゆえ, この「哲学的」説明は, スミスにおいては, 価値についての「原始的」説明と呼んでもよい, とされる。また, ホイッターカーは, 「経験的」説明の行なわれる第6, 第7章ではスミスは価値の哲学的本質という思弁的な問題を捨て, 近代的市場における交換価値の

最も重要なしかも相対的にかなり正確な原理、「企業者費用の法則」に向かい、この「経験的」説明において、「哲学的」説明では労働—費用標準と労働—支配標準とをそれらの相互関係について何も述べずに提案したのにたいし、資本の蓄積と土地の占有という条件のもとでの価値の問題にアプローチするとき、これらの標準の關係についての彼の見解を説明し、このような条件のもとでは支配される労働と生産に要する労働とは一致せず、労働—費用と価値との間の比例性が崩れる事情を示した、される。A. C. Whitaker, *ibid.*, pp. 16~31.

II

他方、W. リイブクネヒトは、1902年の著書において、スミスの価値・価格分析の構造に関しては先にみたイングラムと大旨同様な把握を示しているのであるが、⁷⁾ そのさい彼は、『国富論』における一つの文章をとりあげ、その文章はスミスが一方で労働価値説が現代社会にもあてはまると考えていたということを示し、さらにまたそこには剰余価値学説の萌芽形態が見られる、としている。⁸⁾

E. ロールは、初版が1938年に出版された著書において、さらにすすんでスミスの価値論は究極的には労働価値説に依っていたという見地に立ち、⁹⁾ スミスの分析の構造についてつぎのように指摘している。本稿の序でみたスミスの言葉に従って、ロールは、スミスが第1編第4章の末尾において、ある特定の物の効用を表わすものとしての「使用価値」と、他の財貨を購買する力に関するものとしての「交換価値」とを区別し、いわゆる価値のパラドックスを指摘することによってこれら二つの概念の背反關係に言及したとする。ロールによれば、スミス自身は使用価値のさまざまな性質を説明することには興味をもっていなかったのであり、ここで「価値」という言葉の二つの意味を区別したのは、真に重大な作業である交換価値の分析に入る前に、邪魔物を取り除いておくためであったように思える、とされる。そして、スミスによる交換価値の分析は以下の三つの部分に分かれるとされる。第一の部分は、諸商品の交換価値の尺度は何であるか、あるいは、スミスのもう一つのいい方をすれば、諸商品の真実のあるいは

自然的な価格は何であるか、第二の部分は、この自然価格の構成部分は何であるか、第三の部分は、諸商品の市場価格の、それらの自然価格からの偏倚はいかにして生ずるか、ということであり、以上の諸問題に対して、それぞれ第1編の第5、第6、第7章が¹⁰⁾あてられている、とされる。

そしてロールは、以上の三つの部分に分かれるスミスの議論の内的連関を、つぎのように把握している。すなわち、第5章における交換価値の説明は、分業と私的交換という社会的事実から生じる交換価値の質の分析から始まる。スミスによれば、人が富んでいるか貧しいかはその人が獲得しうる有用物の量に従って決まる。しかし分業が行なわれるようになると彼自身の労働が彼にもたらすのはこれらの品物のごく少部分にすぎなくなり、彼の富は、彼が支配しうる他人の労働量に依存することとなる。かくして彼の所有するなんらかの商品の交換価値は、それが支配しうる労働の量に等しくなる。スミスはここから、労働こそが「すべての商品の交換価値の真の尺度である」と結論する。(W. N., p. 30. 大河内訳< I >, 52ページ)ところが、これにすぐ続いて、価値の起源とその尺度に関して、商品の価値をそれと交換に支配しうる労働の量によってのみでなく、その商品の生産に要する労働の量によっても測定しようというもう一つの叙述が現われる。スミスは、後者は前者をいい換えたものにすぎないつもりであるが、それらは全く別のものであり、これら二つの説明は、併行し、混乱して存続していく。(支配労働と投下労働の混乱)そしてそれにつづいてスミスは、交換価値の固有の実体という意味ではなくて、それでもって諸商品の価値を比較する物差しといった意味での、価値の尺度としての労働について、またそれに関連しての貨幣その他のそれに付随する諸問題を論ずる。(以上、第5章)その後スミスはさらに立ち入って彼の価値論の解明を進める。第6章の冒頭で、スミスは、商品の交換価値の、その商品の生産に必要な労働量による規定は、労働者が彼の労働の全生産物を所有する「資本^{ストック}の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」、すなわち前一資本主義時代においてのみ妥当するということを、指摘する。(一定量の

商品が購入しうる労働の量と一商品に体现された労働の量という交換価値についての二つの考え方のゆえに、スミスは、労働価値説の妥当性を、このようなものに限定せざるをえなかった。）しかし、このような条件がなくなると、スミスによれば、すべての商品の真実価値は、三つの構成部分、賃金、利潤、地代に分解せざるをえなくなる。この事態に直面してスミスはなおも価格の各構成部分の真実価値はそれが支配しうる労働量に等しいと主張しはするが、賃金、利潤、地代は単に社会のそれぞれの階級の所得（すなわち、それによって諸商品の価値が分配される諸形態）の唯一の源泉であるだけでなく、同時にそれらは、「すべての交換価値の……、三つの基本的な源泉」（W. N., p. 52. 大河内訳＜I＞88～89ページ。）となるという言葉によって、事実上、新たな価値論、初期的な生産費用価値説を宣言し、労働価値説を、完全には放棄しはしなかったが、少なくとも外見上は、放棄した。（以上、第6章）その後の議論は、この基礎のうえで続けられ、自然価格と市場価格との差異に関する問題にすすんでいく。¹¹⁾（以上、第7章）

7) リイプクネヒトは、スミスの価値・価格分析をつぎのような構造をもつものとして把握している。すなわち、スミスは、彼の場合効用と同一物である使用価値と他財貨に対する購買力である交換価値とを区別し、そして交換価値の本質、交換価値の決定という交換価値の研究を行なう。そのさい彼は、土地の占有や資本の蓄積にさきだつ事物の本源的状態（社会の原始状態）と土地の占有と資本の蓄積が行なわれる状態（近代のブルジョア社会）という二つの歴史期を区別して考察する。社会の原始状態では、財貨の獲得・生産に投入された相対的労働量が財貨の交換価値決定の唯一の要素であり、労働が交換価値の源泉であり、労働時間が交換価値の尺度であるが、そのさい労働の質の差異が考慮に入れられるべきことが指摘される。他方、スミスはブルジョア社会における価値の究極的な決定者を見つけ出すことに没頭したのであるが、スミスは、この近代のブルジョア社会では、国民所得が究極的に分解していく三つの構成部分がたいていの商品の交換価値の必然的構成部分であること、さらに、これらの三つの構成部分があらゆる交換価値の本源的源泉であることを、証明しようとした。すなわち、近代のブルジョア社会では、商品の獲得・生産に投入された相対的労働量は財貨の交換価値の唯一の要素ではなく、賃金、利潤、地代がたいていの商品の価格の構成部分をなす、とされるのである。しかしまた、それでもって購買もしくは支配することのできる労働がこれら三つの構成部分

の真実価値 (real value) の尺度とされる。そして、自然率・平均率での、生産に要する賃金、利潤、地代の合計によって、多くの商品の交換価値あるいは自然的または一般的価値が決定され、他方、その時々の商品の市場価格は、その商品の自然価格を支払う意志と能力をもつ人々の需要、有効需要と供給との割合によって決るとされる。そしてまた、自然価格と市場価格の関係、および、生産要素の諸生産部門間の移動によって市場価格が自然価格に一致する傾向、さらに、それを妨げる諸要因が示されている、とするのである。W. リーブクネヒト著、八木澤善次訳『英国価値学説史』(W. Liebknecht, *Zur Geschichte der Werttheorie in England*, 1902.ただし筆者は原著を見ることはできなかった。) 弘文堂書店、1926年、45～55ページ。

8) その文章とは、いわゆる「初期未開の社会状態」についてのスミスの言及の直後に示されているつぎの文章である。「完成品を、貨幣なり労働なり他の財貨なりと交換する場合には、こうした冒険に自分の資本^{ストック}を思いきって投じるこの企業家にたいして、その利潤として、原料の価格と職人の賃金とを支払うのに足りる以上になにかが与えられなければならない。それゆえ、職人たちが原料に付加する価値は、この場合、二つの部分に分れるのであって、その一つは、彼らの賃金を支払い、他の一つは、彼らの雇主が前払した原料と賃金との全資本に対する雇主の利潤を支払う。」(W. N., p. 48. 大河内訳<I>, 82ページ。) この文章は、スミスが材料品の交換価値の増大をただ賃金労働者の労働に帰させ、したがって彼が言及している労働価値説が現代社会にとってもあてはまると解しているということ、また、資本家の利潤はの場合まったく労働の価格とこの労働それ自体を通して生産物に付加される価値との間の差から出ているようであるということを示し、ここには、マルクスの剰余価値学説の萌芽が見られる、とするのである。W. リーブクネヒト著、八木澤善次訳、前掲書、50～51ページ。

9) ロールはつぎのように述べている。「彼(スミス—引用者)の価値論は、結局は、リカードが彼自身の分析の基礎として選び出すこととなったものすなわち労働価値説に、依っていた。労働価値説についての説明を行なうさいにスミスがいかに矛盾していたとしても、彼は労働価値説の一つの重要な適用においては——すべての利潤の根源をなす剰余についての彼の議論においては——最も厳格にそれを堅持した。」E. Roll, *A History of Economic Thought*, (1st ed., 1938, 2nd ed., 1945) Kinokuniya Asian Edition, 1975, p. 157. 隅谷三喜男訳『経済学史』(上, 下), (第2版の訳) 有斐閣, 1970年, (上), 201ページ。

10) E. Roll, *ibid.*, p. 156. 邦訳(上)199～200ページ。

11) E. Roll, *ibid.*, pp. 158～163. 邦訳(上)202～208ページ。なお、最後の第7章での議論に関しては、ロールは、本文でみた指摘につづいて、つぎのことを示すにとどまっている。すなわち、スミスの議論においては「前者(自然価格—引用者)は、その各構成部分の自然価格の合計とまさに合致する価格であり、第二のもの(市場

価格一引用者）は、需要と供給によって定まる。供給の過剰あるいは不足は、価格の諸構成部分をしてその自然率以下、あるいは以上に変動せしめる。こんどはそれによって、需要と見合うところまで、供給の減少なり増加なりが生ずる。市場価格は、常に自然価格に等しくなろうとする傾向をもつ。自然価格自体は、賃金、利潤および地代の自然率に従って変化するものであり、アダム・スミスは、これにつづく諸章でこれらの問題を扱っている。」(E. Roll, *ibid.*, p. 162. 邦訳(上)207ページ。)

Ⅲ

(Ⅲ—a)

リイブクネヒト、ロールの見解とは対照的に、O.H. テイラーは、1960年の著書において、スミスは（投下）労働価値説の限界を十分に認識していたのであり、彼が主に関心を抱いていた彼自身の時代および国についてはそれを適用しようとはせず、むしろそれを放棄し、それに代えて、財貨の「自然価格」はその財貨の生産に要する全費用によって決定されとした、とするのであるが、テイラーはスミスの議論をつぎのように把握している。(1)スミスは「価値」の研究において、まず、「使用価値」と「交換価値」とを区別し、そして、「限界」概念をもっていなかったためにいわゆる「価値のパラドックス」を解決できずに、その「価値のパラドックス」をつうじて、誤って、使用価値を交換価値の基礎でないと退ける。(2)その後、交換価値の基礎についての研究を進める前に、彼は、交換価値の真の尺度という別の問題をとりあげ、尺度としての貨幣を退け、交換価値の理想的な尺度として労働者にとって一定不変の主観的価値をもつ労苦と骨折りとしての労働、に対する支配、支配労働量つまり価値の支配労働尺度、次善の測定物差しとして穀物つまり穀物尺度をもち出し、それらに関する諸議論を展開する。(3)つづいてスミスは、交換価値の尺度とは別個の問題としての交換価値の基礎、決定に関する問題へと進む。(3—a)スミスはまず、異なる財貨がそれらの財貨の生産に要する労働時間数の間の比率で交換されるという彼が「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未^{ストック}

開の社会状態」として想像したものについての議論を、鹿とビーバーの例を用いながら、行なう。そしてこの「頭の中での実験」¹²⁾の結果として、このような労働価値説はどのように構想もしくは仮定されたきわめて単純な条件のもとにおいてのみ真実であろうという考えに到達した。(3—b)以上の議論の後に、スミスは、市場において財貨の現実の価格を決定するとともにまた逆にその価格によって影響されるところのプロセスについての、彼の最終的な理論に到達する。そこでは、自由な競争的経済において、すべての財貨の供給をそれらの財貨に対する(変動する)需要に、またそれらの財貨の価格を、それらの財貨各1単位の生産に要する労働、資本、土地に対して支払われねばならない賃金、利潤、地代からなると考えられたそれらの財貨の生産費の水準に、調整・再調整している諸プロセスについての、スミスの理論が展開される。価格づけに関するこの理論は二つの部分からなる。第一の部分では、その時々の一時的な「市場価格」の決定を説明し、なんらかの時点でのその時々¹³⁾の現実の価格、それを直接的に基礎づけるその時々¹³⁾の需要と供給の状態といったことが論題としてとりあげられる。第二の部分は、長期均衡価格すなわち「自然」価格の決定を説明するのであるが、そこでは、資源配分の「自然的」パターンをもたらすとともにそれを維持しましたすべての生産物の産出高(供給)と価格とを調整するといった、競争的価格メカニズムをつうじての長期的な調整についてのスミスの議論が展開される¹³⁾。

M. ボウレイは、1973年の著書において、さらにすすんで、『国富論』でのスミスの価値・価格分析の目的の一つには、(投下)労働価値説は限られた妥当性しかもたないということを示すことにあり、そして第1編第6章の議論の配置は、まさにこのことを示すようまた第7章での、投入実体ではなく供給価格に基礎づけられる自然価格についての議論を正当化するように、工夫されている、とする。そして、ボウレイは、『国富論』第1編第5、第6、第7章という三つの章の間の関係は従来不当に無視されてきたが、これら三つの章は、第4章の終りで列挙された価値の諸問題について一つの統合された検討であることを意図されており、またそのようなも

のと考えられるべきである、とする。すなわち、スミスは第4章の終りにおいて、財貨の交換価値はそれらの財貨の効用あるいは有用性、使用価値には一致しないとし、三つの問題を列挙するのであるが、ボウレイによれば、それにつづく章、第5章は、まさにそれがそうであると称するもの、すなわち、真実価格と貨幣価格との間の相違および価値測定の問題についての議論であり、そこでは、商品を労働に対する支配力と交換できることによってはおかれる労働の不効用という不変の単位のタームでの価値の絶対尺度が示される、すなわち、不効用を伴うものとしての労働に対する支配力が価値の真の尺度であるとされ、この意味での価値の支配労働説が展開され、さらに、なんらかの特定の時点あるいは期間において、貨幣での労働の価格あるいは穀物での労働の価格が一定でありうる限りにおいては、一方で貨幣が、他方で穀物が、価値の近似的な尺度として使用されうるということの事情が説明されるのであって、さきにみたロールの見解とは対照的に、スミスはここでは価値の基礎^{ベース}としてのあるいは価値測定の基礎^{ベース}としての投入実体にことさらに関心を抱いていたわけではなかった、とされる。¹⁵⁾また、第6章は、ボウレイによれば、本稿脚注14)ですでにみられた意図をもって展開されるのであるが、そこではまず、「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」での投入労働価値説が述べられ、その後、資本とそれに対する利潤、土地とそれに対する地代の説明をつうじて、労働に加えて資本や私有財産となった土地が使用されるに到ると投入労働は交換価値を規定することができなくなり、多くの商品の価格には、賃金に加えて利潤と地代が構成部分として入り込んでくることが示され、さらに、以上の議論にもとづいて価格の構成部分の分配の側面に関する説明がなされる、とされる。¹⁶⁾そしてボウレイは、第6章での価格の構成部分の確認は、とりわけ、スミスが資本の利潤および土地の地代を取り扱うことの必要性に気づいていたことを示しており、第7章において、スミスは、労働の賃金に加えてこれらの追加的な構成要素を考慮に入れるために、また、第4章の終りであげた交換価値に関する第三の問題に答えるために、

『講義』での自然価格論の再述、彫琢をなす、とするのであった。¹⁷⁾

- 12) O. H. Taylor, *A History of Economic Thought—Social Ideas and Economic Theories from Quesnay to Keynes—*, New York, Toronto, London, 1960, p. 106.
- 13) なお、テイラーによれば、スミスの議論のこの最後の部分が、ほとんどのその後の経済理論の中心的な部分、そして公共の厚生にとっての自由で競争的な経済のメリットの論証の核、となり、またそうでありつづけたものである、とされる。O. H. Taylor, *ibid.*, pp. 102~112.
- 14) ボウレイは、スミスは彼自身進歩した社会については投入労働価値説を展開することはできないということを発見したのであってスミスの自然価格の理論はいわば彼の分析に導入された控え選手であったという見解を退ける。すなわちボウレイによれば、もちろんスミスは、労働は不効用を伴うがゆえに彼にとって常に稀少要素であったから、問題を労働のタームで考えようとしたのであるが、スミスは『講義』においてそうであった以上に『国富論』において投入実体型価値説 (the physical-input type of value-theory) に関心を抱いていたわけではなく、カンティヨンの理論がボッスルスウェイトやJ. ハリスの労作の中にすでに組み込まれていた当時の理論的状况の中で、スミスはむしろ、『国富論』において、投入実体説は稀少要素のときにすなわち非常に特殊な諸仮定を含むケースで妥当するだけであろうということを示すことが必要だと判断したと考えるのが、最も自然であろう、とされる。そしてまたボウレイは、第6章はベティーの伝統をつぐ諸理論およびスミス自身の『講義』とは対照的に、スミスが価値理論は労働や土地と同じように資本をも考慮に入れなければならないと考えていることを強調することが意図されており、またこの章は、特殊な諸仮定が設けられないかぎり投入実体は交換価値を決定しえないということの論証を提示することを意図されており、したがってまた、ベティー—カンティヨンの伝統における投入実体ではなく供給価格に基礎づけられる自然価格についてのそれにつづく説明を正当化するように、意識的に配置されているように思える、とする。すなわち、ボウレイによれば、もしもスミスが価値尺度についての第5章から「諸商品の自然価格と市場価格」についての第7章へと直行していたならば、『国富論』における労働価値説の問題は存在しなかったであろう、そして、スミスは自然価格を投入実体のタームでなく供給価格のタームで考察しているという点で『講義』におけるのと同じ線に沿って進行していたということ、また、スミスはことさらに前者に関心を抱いていたわけではなかったということが明らかになっていたであろう、しかしながら、もしもスミスがこのようにしていたならば、投入実体価値説はただ特殊な状況のもとでのみ適用しうるのだということをスミスが示すことはなかったであろうが、このことを示す必要性ということが、まさに第6章の冒頭において投入労働価値説が導入されたことの合理的説明を提供している、つ

まり、この章においてスミスが投入労働説を導入した唯一の目的は、その説は限られた妥当性しかもたないということを示すためであった、とされる。ちなみに、ポウレイによれば、価格の三つの構成要素ということの導入は、ただ単に、労働、資本および土地は賃金、利潤および地代という形で支払いを受けるということを描述べることによって達成されうるのであり、このことはそれにさきだつ投入労働説についての諸パラグラフに依存するものではない。むしろそれとは逆に、資本に対して利潤、土地に対して地代を支払うことの必要性ということとは、直接的に、投入労働定理の妥当性を限定するということを示しているのである。もしもスミスが実際には価格の諸構成部分を確認することだけに関心を抱いていたならば、彼は投入労働説に何も言及しなくとも、それを確認できたはずであり、それにつづく分配についての諸パラグラフも、価格の諸構成部分の一覧表をつくること以外のことには何にも依存しない。スミス自身は、投入実体価値説を興味あるものとは考えていなかったものであり、むしろ、そのような説は不適切なものであるということを示すことが必要であると考えていたのである。そして、そのような説をほうむり去ることの必要性は、便利にも、価格の諸構成部分は何であるかということを描述することによって充足されたのであり、そしてそれはまた、第7章において市場価格および自然価格の概念を描述することの準備として役立つこととなっている、というのである。M. Bowley, *Studies in the History of Economic Theory before 1870*, London, 1973, pp. 111~112, 117~120.

なお、第6章の冒頭において投入労働価値説が導入されたのは、利潤および地代は搾取の結果であるということを示すことが意図されていたという解釈に対するポウレイの論評については、M. Bowley, *ibid.*, pp. 120~121を見よ。

- 15) M. Bowley, *ibid.*, pp. 110~117. ただし、ポウレイは、第5章に労働投入が「支配される労働」に影響を及ぼすかもしれないということを示唆する文章が存在するということは認めている。その文章とは、「それらはある一定量の労働の価値を含んでおり、その一定量の労働の価値を我々は、その場合、それと等しい労働量の価値を含んでいるとみなされるものと交換するのである。」(W. N., p. 30. 大河内訳<I> >53ページ。)というものである。M. Bowley, *ibid.*, p. 113.
- 16) 第6章についてのポウレイの把握をもう少し詳しく示そうとすれば、以下のよう
に示すことができる。第6章は、未開社会での投入労働価値説についての言説から
始まっている。その議論はつぎのようなものである。すなわち、労働は常に労苦
と骨折りである、それゆえ、未開社会においてさえ、人々はより多くの労働の生産
物をより少ない労働の生産物と交換しようとはしないであろう。鹿とビーバーの例
によって例証されているように、土地が自由財でいかなる資本も使用されていず、
稀少な要素として労働のみをもつこの未開社会においては、財貨は労働投入に比例

して交換される。なお、スミスは、この比例は実際にはそこに含まれる辛さあるいは熟練の程度の相違を考慮して調整されるであろうということを示唆するのであるが、この説明は、これらの条件のもとでは労働投入が「その商品がふつう購買し、支配し、またこれと交換されるべき労働の量を左右」できる唯一の事情である（W. N., pp. 47～48. 大河内訳＜I＞82ページ。），という言説で終わっている。したがって、このケースにおいては、労働投入と支配される労働が労働の苦痛費用のタームでの真実価値の尺度として使用されたとしても、それらは同一の答えを与えることとなる。しかしスミスは直ちに、単純な鹿／ビーバー社会での交換価値の決定と^{ストック}資本が生産において使用されている社会での交換価値の決定との間の相違を示すことへと進む。すなわち、スミスによれば^{ストック}資本の利潤は^{ストック}資本の額とともに変化するとされ、またスミスは、生産において使用される労働に対する^{ストック}資本の相対的な重要性は生産が異なるにつれて異なり、それゆえ賃金と比べての利潤の相対的な重要性も異なる、ということを説明する。さらに、利潤の変動は投資者の管理的労働の投入とは関係がなく、利潤は、「労働の賃金とはぜんぜん異なる」構成部分をなし、「まったく異なる原理によって決定されるのである」（W. N., pp. 48～49. 大河内訳＜I＞82～84ページ。），とされる。したがって、もしも^{ストック}資本が使用されるならば、労働投入は交換価値を規定することができない、ということになる。そしてその議論は、すべての土地が私有財産となり、したがって利潤と同じように地代も価格の構成部分として現出するケースを取り扱うように拡大され、そして、「あらゆる社会において、すべての商品の価格は、究極的にはこれら三つの部分のどれか一つに、またはそのすべてに分れるのであって、あらゆる進歩した社会では、この三つのすべてが、大多数の商品の価格のなかに、多かれ少なかれその構成部分としてはいり込んでいるのである」（W. N., p. 50. 大河内訳＜I＞85ページ。），とされるのである。そして、スミスは、如何にして、^{ストック}価格のこれらの構成要素の相対的な大きさが、それらの生産における労働、資本および土地の重要性が変化することに応じて、変化するであろうか、ということを説明する。たとえば、穀物と比べてのパンにおけるように、財貨が生産されるさいにその「精製工程が拡大するにつれて」、地代の相対的な重要性は低下する、ということを述べる。そしてまた、スミスは、改良された社会においてさえ、その価格に地代が入らなかつたりあるいは利潤も地代も入らないような少数の商品は存在するかもしれないことを指摘する。以上の議論の後、第6章の残りの部分は、価格の構成部分の分配の側面に関するもの、すなわち、国民生産物の総価値は、生産において支払われる賃金、利潤および地代の総計に等しいということを示すことに関するものである。すべての商品の価格もしくは交換価値は、それらの諸構成部分に分解することから、スミスは、つぎのように結論する。すなわち、「あらゆる国の労働の年々の全生産物を構成して

いるすべての商品の価格も、ひっくりかえしてみると、同じ三部分に分れて、その国のさまざまな住民たちの労働の賃金、資本^{ストック}の利潤、または土地の地代として彼らの間に分配されるにちがいない。あらゆる社会の労働によって年々採集または生産されるものの総体、または同じことになるが、この総体の全価格は、このようにして、社会のさまざまな成員のうちのあるものの間にまず最初に分配される。賃金と利潤と地代は、すべての交換価値の三つの基本的な源泉であり、同時にすべての収入の三つの基本的な源泉である。そして他のすべての収入は、結局、これらのうちのどれかから派生するものである。」(W. N., p. 52. 大河内訳< I >88~89ページ。)。そして、スミスは、たとえば自分自身の土地で働く農業者や自分の菜園を使って自分の手で栽培する園芸家を例にとりつつ、この命題は、ある場合には一人の人が一つ以上の要素を供給し、したがってまたその所有する要素の別々の報酬からなる所得を受け取るという事実によっては影響されない、ということを指摘する。M. Bowley, *ibid.*, pp. 117~120.

- 17) 第7章でのスミスの議論については、ボウレイは、全体的にはさきに見たテイラーの把握(3-b)と類似した把握をなすのであるが、ボウレイによれば、スミスが彼の議論を展開するさい、労働、土地、資本という生産要素の自然価格を、ある特定の時点におけるすべての異なる用途での「通常率もしくは平均率」と定義し、そして賃金、利潤、地代の通常率あるいは平均率は、相異なった諸用途の特定の環境あるいは特定の土地区画の質や肥沃性によって制約されたその社会の成長パラメーターによって決定される、としている。これらの通常率ないし平均率は、ある特定の時点において現実存在する率であり、また、諸商品の自然価格に関連する自然率とスミスが考えているものである。そして、各々の商品の生産に使用される生産要素の既存のこの通常率ないし平均率、自然率の合計が諸商品の自然価格なのである。スミスの言う商品の自然価格は供給価格であった。スミスはまた、諸商品の市場価格と自然価格との関係を分析するために有効需要という概念を導入して、それら両価格の関係を議論する。スミスはさらに、彼の有効需要の概念を、価格と資源配分との関係を示すために使用した。そこでは、価格メカニズムは、諸生産要素の市場価格と自然価格との間の乖離の原因となるところの、諸商品の市場価格と自然価格との間の乖離によって、諸用途間に諸生産要素を配分するのであった。そしてスミスは、「それゆえ、自然価格というのは、いわば中心価格であって、そこに向けてすべての商品の価格がたえずひきつけられるものなのである。さまざまな偶然の事情が、ときにはこれらの商品価格を中心価格以上に高く釣り上げておくこともあるし、またときにはその下に押し下げることもあるだろうが、このような静止と持続の中心におちつくのを妨げる障害がなんであろうと、これらの価格はたえずこの中心に向かって動くのである。」(W. N., p. 58. 大河内訳< I >99ページ。))と結論し

た。そしてスミスは、市場価格と自然価格との間の相違をひきおこした調整の速度に影響を及ぼすであろう諸事情についての説明をして彼の分析を終えた、とされる。M. Bowley, *ibid.*, pp. 121~125. 岡田純一「近代経済学とスミス——最近の理論史的研究——」(経済学史学会編『『国富論』の成立』, 岩波書店, 1976年, 所収), 350~353ページ。

(Ⅲ—b)

スミスが『国富論』の第1編第5章から第7章において価値・価格に関する諸問題を取り扱うとき価値の尺度と価値の決定という二つの問題を議論し、そして価値の決定に関する議論では(投下)労働価値説を意識的に否定しようとしていたという見解は、E. G. ウェストの1969年の著書の中にも見られるが、そのさいウェストは、スミスは価値の決定については(総)生産費説を主張しそして価値の尺度に関する第5章では長期的実質所得を測定するために「労働—支配」^{スタンダード}標準を厚生¹⁸⁾の指標として使用した、としている。

スミスの価値・価格分析の構造についてウェストと類似した把握をし、第5章においてスミスが労働^{スタンダード}標準を経済的厚生¹⁸⁾の指標として採用したという解釈は、すでにM. ブローグによっても示されている。1959年の論文では、ブローグは、この側面を強調しつつ、スミスの議論をつぎのように示している。ブローグはこの論文において、スミスが労働価値説を定式化しようとしたが商品の労働購買力と商品の生産に体现された労働量とを混同し生産物の労働価格と生産物の労働費用という異なる事柄を同一視したといった見解に対して、『国富論』を偏見なく読めば、スミスが、価値の尺度と価値の原因との間の区別に気づいていたということ、また、価値の原因にはほとんどかわりあわず、なんらかの時点における相対価格がなぜそのようなものであるのかといった価値論の伝統的な問題はただ要約的な取扱を受けただけで、スミスはむしろ実質所得の不変の尺度を発見することに興味を抱いていたということがわかる、とする。ブローグによると、たしかに『国富論』における諸論題の配置順序はスミスの目的に

についての誤解を招くこととなった、第4章は「財貨の相対価値または交換価値」の決定を分析することを約束して終わっている。しかしつづく第5章はそのようなことをなさず、貨幣価格における変化を評価するための異時点間の^{スタンダード}標準を定義することを試みており、資本は過去に支出された労働に還元されうろという考え方を退けて単純な生産貨幣費用説で終わっている第6、第7章までは、相対価格の決定は議論されない。そして、第6、第7章からのこの結論も第5章で提起された「労働という物差し」には影響を及ぼしはしない、だが、もし第5章が第6、第7章の先ではなく後についていたならば、このことはもっとはっきりしていたであろう、とされる。ところで、ブローグは、「労働という測定物差し」についてのスミスの議論は、こんにち、指数問題を克服しようという努力を含む主観的厚生経済学の一つの試みと見なされているとする、そしてブローグは、スミスが資本蓄積率の指標、主観的所得の大きさの指標という二つの別個な意味で労働^{スタンダード}標準を使用し、そしてスミスの議論は発展しつつある経済においてはこれら二つの指標は同一のものになるということを示すことに向けられている、とする¹⁹⁾。

なお、ブローグは、1962年に初版が出た彼の著書においては、スミスの議論について比較的詳細な見解を示しているのであるが、そこにおいても、第6、第7章は何故に相対価格はそのようなものであるのかという伝統的な問題を取り扱うものである、とされ、第5章は、価値論にかかわるものというよりもむしろ厚生経済学にかかわるもの、また特に、厚生²⁰⁾の指数問題にかかわるものである、とされ、そこでは一定数の人・時(man-hours)という意味での労働支配ではなく、不効用・個人にとっての仕事の心理的コストという意味での労働、に対する支配、このような意味での不変の測定標準としての支配労働^{スタンダード}標準が弁護され、そしてまた、スミスは賃金単位を表示する安定的な測定規準を選択する問題に関連して銀、穀物を議論した、とされ、そしてこの章でのスミスの説明の要点は、支配労働^{スタンダード}標準が経済的厚生²¹⁾の指標を提供するというものであった、とされる。そしてブローグは、

第1編第5章は一つの主観的厚生²²⁾の労働説を提示し、第6章は労働が唯一の生産要素である特殊なケースでの素朴な価格決定論をもてあそび、第7章は相対価格の生産費説を提供している、とするのであった。

他方、D. P. オブライアンも1975年の著書において、スミスが第5章では価値尺度に関する議論を、第6、第7章では価値決定に関する議論を展開したとする。しかしそのさい、オブライアンは、第5章では労働（不変な不効用をもつという意味での労働）に対する支配、「支配労働」が富、価値の真の尺度として使用されているとするのであるが、この章でスミスは一つの厚生指標を提示しようと試みていたという見解を退けて、スミスはこの章では、社会の進歩的・停滞的・衰退の状態に依存する労働者の生活資料水準の経時的変動に起因するところの商品の真実価値（不効用支配）の経時的な変動に関する問題と、貨幣価値の変動によるある所与の貨幣支払いの他商品に対する支配力の経時的な変動に関する問題という、二つの連結されはするが異なる問題に取り組んでいたものであり、そしてこの脈絡の中で穀物が取り扱われているのである、とする。他方、価値決定に関する議論については、オブライアンは、いわゆる「初期末開の社会状態」での交換価値の決定についての説明も一つの生産費説であるとみて、第6、第7章でスミスは「生産費」価値説を二つの形で提出した、としている。²⁵⁾

18) ウェストは、スミスは『国富論』の第1編第5章から第7章において価値もしくは価格づけに関する諸問題を議論し、そこでは、価値の尺度、と価値の決定という二つの問題を議論した、とする。ウェストによれば、第5章においてスミスは、長期的実質所得を測定するために「労働—支配」標準 (a “labour-command” standard) ^{インデックス}を厚生^{スタンダード}の指標として使用した、すなわち、各人がうんざりする労働を回避してそれを他人に課することができればできるほど彼は暮し向きがより一層良いのであり、労苦をそのように移転したいという各人の欲望が分業の慣行を促進するのであり、そして富 (wealth) の究極の標準は、各人がその富をもって市場で購買する他の人々の労働の量となる、というのである。そしてまたウェストは、価値の指標としてある物を使用することとこれと同一の「ある物」が価値の唯一の原因であると主張することとの間には決定的な相違があるとして、スミスがここで労働価値説への混乱した試みをなしたというマルクスの主張は大いに誤った解釈である、とする。他方、

第6, 第7章については, ウェストによれば, スミスはここでは実際には労働価値説を概略したのではなくて, 価値の(総)生産費説 [a (total) cost of production theory of value] を概略した, つまり, スミスは, 長期的にはある品物の自然価格はその品物を生産するさいに使用されるすべての要素に対して支払われるすべての額——賃金, 利潤, 地代——の合計であるということを主張したのであり, そして, スミスは彼の先行者たちの間にかくも広く いきわたっていた労働費用価値説 (the labor cost theory of value) を否定することに骨を折っていたように思える, とされるのであった。E. G. West, *Adam Smith*, New York, 1969, pp. 169~170.

- 19) M. Blaug, 'Welfare Indices in the *Wealth of Nations*', *Southern Economic Journal*, vol. xxvi, no. 1~4, July 1959~April 1960, pp. 150~153.

20) ブローグによれば, スミスはなんらかの時点では「市場価格」は需要と供給によって決定されるが, 需要と供給の力が作用するにつれて市場価格の日々の変動および時間的変動すら, たえず, 正常なあるいはスミスのいう「自然的な」水準に帰する傾向があるとしており, そして, スミスが「市場価格」と「自然価格」と呼ぶものは, マーシャルが短期価格と長期価格と呼ぶものと同一のものであり, また, マーシャルと同じようにスミスも本質的には, いかにして価格が長期において決定されるかということを説明することに興味を抱いていた, とされる。ところで, ブローグによれば, スミスはここで議論の冒頭で, 鹿/ビーバーの例を用いながら「初期末開の社会状態」での交換を説明するのであるが, 『国富論』には種々の生産要素が貨幣以外のなんらかの公分母で同一化されうるといった示唆はなにもなく, また, 特に, 生産財の価値が過去にそれらの生産に投ぜられた労働に還元されうるといった示唆もないのであり, もしも労働価値説というものが商品はその生産に投入された労働量——労働者たちが使用する資本財に体现された労働をも含めて——の逆数たる比率で交換されるという命題を意味するものとすれば, スミスが労働価値説をもっていなかったというのは明らかであり, この「初期末開の社会状態」での交換についての説明は, 彼の究極的な説明を導入するためのものであり, それはまた, 彼の多くの先駆者たちによってほのめかされていた労働価値説を反駁することが意図されていたのであり, 彼はそのような理論は「初期末開の社会状態」という特殊な, 人工的な状態のもとでのみ有効であるということを示そうとしたのだ, とされる。ところで, ブローグによれば, スミスの究極的な説明とは, 現実の世界では商品の価値は, それをつくるために用いられたいっさいの要素に対して支払われる正常額の総計であり, それゆえ商品の「自然価格」は, それ自身が労働, 土地, 資本の「自然価格」としての賃金, 地代, 利潤からなる生産貨幣費用によって決定されることとなる, というものである。ところが, ブローグによれば, 商品価値についての生産費説は, 生産的なサービスの価格が如何に決定されるかということについての説明を含まなければ空虚で無意味なのであるが, さきにみたボウレイとちが

って、ブローグは、スミスは事実上、賃金と地代の一貫した理論をもたずまた利潤もしくは純粹利子の理論をもたなかったのであり、そこで一物品の正常価格は費用をちょうどつぐなう価格であると言うのは、価格によって価格を説明するものであり、この意味ではスミスはなんらの価値論をもっていないかった、ということを指摘している。M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, (1st ed., 1962, 2nd ed., 1968) 3rd ed., Cambridge, 1978, pp. 40~41. 久保芳和・真実一男・杉原四郎・宮崎犀一・関恒義・浅野栄一訳『経済理論の歴史』(全3巻)(初版の訳)東洋経済新報社, 1966~1968年, (上), 55~56ページ。

- 21) M. Blaug, *ibid.*, pp. 51~53. 邦訳(上)66~70ページ。なお, R. H. キャンベルと A. S. スキナーは, 1976年のグラスゴー版『国富論』への序文において, 『国富論』の各章についての説明の中で, 第5章においてスミスは, 人は自分の受取高の価値を貨幣のタームで測定しがちであるが厚生 of 真の尺度とは貨幣の値うちによって確立されるべきものであり, また, その貨幣の真の値うちは獲得されうる生産物の量(換言すれば, 支配される労働)によって決定されるということを, 熱心に, 確証しようとした, としている。そしてまた彼らは, 第5章においてスミスは, さまざまな時代における経済的厚生 of 水準を比較することができるような不変の価値尺度を見つけだそうとすることほどには, 直接的には, 普通に理解されているものとしての交換価値の問題には, それほど関心を抱いていたわけではなかったということ, そしてまた, スミスをしていわゆる「価値のパラドックス」——彼がすでに『講義』において説明していたパラドックス——を述べさせはしたけれども「解決」させはしなかったのは, おそらく, この特殊なパースペクティブであった, ということを指摘している。R. H. Campbell and A. S. Skinner, 'General Introduction' to *the Wealth of Nations* (Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R. H. Campbell and A. S. Skinner; textual editor W. B. Todd, 2 vols, Oxford, 1976), p. 24.
- 22) また, ブローグは, スミスが労働価値説を定式化しようとしたが, 生産物によって「支配される労働」とその生産物に「体现された労働」とを混同したという見解に対して, スミスは労働価値説と正当に呼ばれうるようなものを定式化しようと試みたわけではなく, また, 支配労働説はたとえそれがどのようなものであろうとも一つの価値理論ではありえないのであり, スミスが生産物の労働価格と生産物の労働費用といった異なる現象を混同したということを示唆するのは誤っている, とする。さらにまたブローグは, 第1編第11章における銀の価値についての「余論」は物価の歴史を分析するにさいして労働標準を利用しているとしつつ, この「余論」への注意を喚起している。M. Blaug, *ibid.*, pp. 53~54. 邦訳(上)70~71ページ。
- 23) このような見解を示しているものとして, オブライアンは, H. M. Robertson

and W. L. Taylor, 'Adam Smith's Approach to the Theory of Value', *Economic Journal*, 67 (1957) pp. 181~198 と、前掲の M. ブローグの論文をあげ、そしてつぎのように論評している。すなわち、オブライアンによれば、スミスの議論においては商品の「真実価値」は、その商品の労働価格すなわちその商品が支配する不効用の単位数であるのであるが、これらの論者は、ある所与の額の実質所得を獲得するのに伴う労働不効用の削減ということと結びつけられる厚生改善を見出すことにスミスは関心を抱いていた、とみている。しかしながらもしこのことが意味をなすとするならば、我々は、スミスがたとえば経済成長とともに一人当たり実質賃金が増加しているといったことを示すようななんらかの経時的な厚生尺度を提供しているのを見出すことを、期待するであろう。しかし実際にはスミスはこのようなことをしていないのであり、彼は、穀物賃金は長期的には有効にも、不変であるということを示、主張しているのである。D. P. O'Brien, *The Classical Economists*, Oxford, 1975 p. 83.

- 24) スミスが第5章で取り取んだとオブライアンがいう二つの連結されはするが異なる問題を、オブライアンの説明に沿ってもう少し詳しくみれば、つぎのようなものとして示される。労働者の(不変の)不効用を支配するところの生活資料の量は、経時的に、変動する。それゆえ、労働者はたとえどのような水準のものであろうととにかく彼の生活資料を獲得するためには、不変の量の不効用を手放さなければならぬのではあるが、諸商品の真実価値(不効用支配)は、(変動する)生活資料に対する、それらの商品の支配力が変化するにつれて、経時的に、変動することとなる。すなわち、「労働者の生活資料は、……、場合によって非常に異なることがある。たとえば、富裕にむかって発展している社会のほうが、停滞している社会よりも、生活資料はいっそう豊かであり、また停滞している社会のほうが、衰退している社会よりもいっそう豊かである。しかしながら、他のどんな商品も、ある一定の時点では、それがそのときに購買しうる生活資料の量に比例して、より大きい量の労働、またはより小さい量の労働を購買するであろう。」(W. N., p. 35. 大河内訳くI>61ページ。)ということになるのである。これが第一の問題であり、そしてそれは、スミスの議論では、労働者の生活資料の水準を決定するところの社会の前進性の変化の故に生じる差異に関する問題である。もう一つの問題は、貨幣価値の低下の故にある所与の貨幣支払の他の諸商品に対する支配力が経時的に変動することに関する問題、つまり、貨幣価値の変動の故に生じる差異に関する問題である。ところで、オブライアンによれば、これら二つのものは一つになる。すなわち、これら両者はともに究極的には労働不効用に対する支配力の変動を産み出すという意味で、それらは連結されるのである。ただしそれらは、異なった理由から労働不効用に対する支配力の変動を産み出すのである。かくして、長期的には、労働者の生活資料は穀物価格とともに変動するのであるから、変動1は穀物デフレーターによって最

も良く取り扱われるのであり、また、穀物は貨幣よりも安定的であるが故に、穀物デフレーターは変動2を取り扱うのにより適していることとなる、とされる。そしてオブライアンは、上で確認された変動の両源泉は共通の問題すなわち労働不効用に対する支配力（富の本質）の変動に関係するものではあるが、この関係をスミスは社会にとっての厚生標準として使用しているのではなく、部分的な利害にとっての、特に地代受領者の厚生標準として使用しているのであって、一般的な厚生標準を提供したであろうところの総不効用に対する国民所得の比率といったことを取り扱うまでには、進んでいない、とするのであった。D. P. O'Brien, *ibid.*, pp. 82~84.

- 25) すなわち、オブライアンによれば、スミスのいう「初期未開の社会状態」での交換価値の決定は、問題となる生産要素が労働だけといった経済のケースでの「生産費」価値説であり、これは仮説的なロビンソン・クルーソー型の経済に関連するだけである、とされる。そしてまたこのような形での「生産費」価値説に加えて、スミスは普通のケースに関するものとして、労働、資本、土地という三つの生産要素とそれらに対する報酬、賃金、利潤、地代を考慮に入れた場合の「生産費」価値説を提示したとされ、そしてこれは、スミスのいう「自然価格」に関連するとされる。なお、この自然価格は主旨マージナルの長期正常価格と同等視されてもよいかもしれないが、ここでいわれている商品の自然価格とは、その商品を産出し調整し市場に運ぶのに必要な自然率での賃金・利潤・地代の合計によって決定されるといった長期において供給によって決定される価格であるが故に、特殊なものである、とされる。またこれに関連して、(有効)需要と供給の観点からの、価値の短期的決定すなわち市場価格の決定および市場価格と自然価格との同異、さらに、要素報酬への影響をつうじての商品供給量の有効需要への順応、市場価格の自然価格への収斂に関する議論が展開されている、とされる。D. P. O'Brien, *ibid.*, pp. 79~82.

(Ⅲ—c)

他方、S. カウシルは、1973年の論文において、スミスは彼の価値分析を、『国富論』第1編第4章の終りの個所で、水とダイヤモンドの例証を用いながら、使用価値と交換価値との区別をなすことから——また、ただ区別するという目的のためにのみ、すなわち、彼の価値分析の主題つまり交換価値をえり分けるためにのみ——はじめ、そして、各々以下の観点から交換価値の分析のために三つの章——(i)交換価値の「真の」(不変の)尺度(第5章)、(ii)交換価値の原因的な構成部分(第6章)、(iii)通常(自然)

価格からの現実(市場)価格の乖離(第7章)——を設けることを約束している、とするのであるが、カウシルは、²⁶⁾(i)の交換価値の「真の」(不変の)尺度に関連して、スミスは穀物や銀はそれら自体の価値において不変なものではなく、したがってまた、交換価値の異時点間および異場所間の比較のためには不適切で不満足なものであるとして、商品のまた諸商品の総計の交換価値の尺度は、その商品またはその諸商品の総計が一般に購買する、支配するもしくはそれとひきかえに交換される——主観的な不効用、労苦、骨折りとしての——労働の量であるとし、ただこの支配労働尺度の客観的な相対物として貨幣賃金・単位尺度、穀物賃金・単位尺度を考えた、ということを描き出すのであるが、カウシルは、それに加えて、スミスにおける商品の交換価値の尺度としての「支配労働尺度」は、スミスによる経済進歩の指標の追求と結びつけて理解することができ、そしてこの「支配労働尺度」は一時間一人当り生産性(PMH)の逆数であるとし、この「支配労働尺度」という形でスミスは彼の成長中心的な議論にとって肝要なGNPの測定、GNPの異時点間および異場所間の比較をなすための装置を彼なりに開拓したように思える、という見解を示している。²⁷⁾

『国富論』においてはスミスは一つの経済成長の理論を展開することに²⁸⁾関心を抱いていたとみることから、いわゆるスミスの価値・価格分析においてはスミスは価値尺度の側面により多くの関心を抱いていたとする見解は、W. J. バーバによって、彼の1967年の著書のなかで、示されている。すなわち、バーバは、スミスは現代の経済学者とは幾分異なった様式で価値・価格の問題にアプローチしたとするのであるが、²⁹⁾バーバによれば、スミスは価値についての彼の説明をつうじて、二つのことをなそうとした、とされる。その一つは、少なくとも、市場価格の動きについての部分的な説明を提供することである。もう一つは、長期間にわたる全体としての経済的变化を測定するためのペースを提供するということである。なお、バーバによれば、後者のことをスミスがなそうとしたのは、市場価格はあまりにも気まぐれに変化するために産出高の異時点間の変化を測定するため

には満足のいくものではなかったため、^{スタンダード}安定的で不変な標準が追求されることになったのだ、とされる。ところで、バーバによれば、国民産出高の変化を測定するための技術を工夫するということに対するスミスの関心は、より大きな重要性をもつものであった。なぜなら、（スミスがそうであったように）長期間にわたる経済的拡張という問題に関心を抱く分析者にとっては実際に成長が生じたのか否かということを確認することができるということが、明らかに重要なことであったからである。バーバは、このようにスミスは短期の市場価格の形成についての分析よりもむしろ長期にわたる経済的变化の測定に役立つ概念を追求することによりいっそう関心を抱いていたのであり、そして、このことは価格変動の歪曲的効果を除去するための技術を、指数もしくはそれに等しいものを、必要としたのであり、スミスはそれを労働——安楽、自由、幸福を犠牲にして労苦と骨折りという不効用をこうむるものとしての労働——に対する支配、「支配労働」³⁰⁾に求め、それに関連して「穀物」をとりあげたのだ、とするのであった。

『国富論』の成長論的側面を強調して、スミスが価値・価格分析を展開したとされている個所では実は、スミスは価値・価格の決定等々といった普通に理解されている意味での価値理論を展開していたというよりもむしろ、産出高の総「価値」の変動というタームで時間をつうじて一社会においてどのような道すじで進歩が生じているのかということを示すための、^{スタンダード}標準³¹⁾を追求していたのだとするかなり極端な見解が、A.K.ダース・グプタによって、1960年の論文において、示されている。すなわち、ダース・グプタは、スミスが「使用価値」と「交換価値」という二つの価値概念があることを認識しており、彼はそのうちで「交換価値」を取り扱ったのであるが、彼においてはこの「交換価値」は測定可能な数量であったのであり、そして彼は商品の交換価値をそれを所有することがもたらす他の財貨に対する購買力であると定義し、商品の（交換）価値の経時的な変動という問題等を解決して交換価値を測定するために、それ自体不変な共通の^{スタンダード}標準を「支配労働」に求め、商品の交換価値は、交換においてその商品が

支配する労働量によって測定されるとした、ということを指摘するのであるが、ダース・グブタは、価値に関する議論におけるスミスの主要な関心は、価値尺度を見出すこと、すなわち、商品の価値の尺度を発見したそれからすすんで諸国民の富の尺度を発見することにあつたのであって、一般的な価値理論を提供するというものではなかつた、価値についての他の諸概念は付随的なものにすぎないのであって、それらの諸概念の意義は、尺度という主要問題との関連でみられるべきである、とするのである。³²⁾

- 26) S. Kaushil, 'The Case of Adam Smith's Value Analysis', *Oxford Economic Papers*, vol. 25, no. 1, March 1973, p. 61. なお、この観点の区別に関して、カウシルはつぎのことを指摘している。すなわち、カウシルによれば、概念的には、上述の(i)は、交換価値という現象が出現した後のことであり、それは、交換価値の「理論」、交換価値の因果的説明を含まず、むしろそれは、既存の交換価値の確認および資格付与 (qualification) といったことを含んでいるのであるが、分析的な目的のためには、尺度、あるいは、むしろ尺度という概念は、交換価値の説明にとっての必要条件である。というのは、もし交換価値の共通の尺度をもたないならば、諸商品のあいだの交換比率を、定量化し、そして通約可能なものにすることができないからであり、そしてそれを行うことができないければ、これらの比率の決定についての分析、因果的説明を始めることができないからである。このように分析的には統合されるが概念的には別個の二つの問題、すなわち、尺度という問題と原因という問題とを、スミスは、混ぜ合わせることなく、別個なものとしている、とされるのであった。S. Kaushil, *ibid.*, p. 62.

なお、スミスが価値の規制の問題を取り扱う前に価値の尺度を取り扱ったことに関しては、R. L. ミークのつぎのような見解がある。すなわち、「……彼の考察のしかたによれば、商品が価値を得るのは、それが社会的労働の生産物であるからなのだが、しかしながら必ずしも、そうである程度においてはなかつた。その価値の程度がどうして規制されるかを見出すためには、人はまず、その価値が、本来どのようにして測られるべきかを見出さなければならないと、スミスは信じたのである。そして、スミスの意見では、その価値の尺度は、その生産の諸条件への注目によっては、確かめられえないのであった。価値の尺度は、その商品の生産の諸条件のなかにでなく、むしろ、その交換の諸条件のなかに、求められるべきなのであって、それはちょうど、我々が磁石の牽引力を、それが受けた磁化の量を調べることによってでなく、それが実際に引き付けうるものがわかった物体の、重量を測ることによって、測定しようとするのと同じである。ある商品の交換価値の『真

の尺度』は、それが正常な場合に市場で示すところの、実際に『他の財貨を買う力』を考慮することによって、確かめられるにちがいないと、スミスはいった。このようにして、その『真の尺度』を確定したのちに、そののちにのみ、人は、その価値を規制または決定するものについての、最終的な問題の考察へと、すすむことができるのであった。」(R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, (1st ed., 1956) 2nd ed., London, 1973, p. 63. 水田 洋・宮本義男訳『労働価値論史研究』, (初版の訳) 日本評論社, 1957年, 70～71ページ。

- 27) S. Kaushil, *ibid.*, pp. 62～63. なお, (ii) の交換価値の原因的な構成部分に関連して, カウシルは, つぎのことを指摘している。すなわち, スミスは, 「支配される労働」をつねに価値の尺度として使用し, 決して価値の原因として使用しはしなかったのであるが, 「体现された労働」という概念を価値の尺度として使用したわけでもまた唯一の価値の原因としたわけでもなく, 労働だけの一要素モデル, 労働と資本の二要素モデル, 労働と資本と土地の三要素モデルといったモデルの次元にかかわらず, 支配される労働は価値の尺度でありつづけたのであり, 労働, 資本, 土地という三つの要素は共同して価値の原因でありつづけた, というのである。そしてまた, カウシルによれば, スミスは労働, 資本, 土地といった三つの生産要素による交換価値の三要素理論をもっており, 支配労働量で測定される単一商品の交換価値についての三要素ミクロ・モデルを展開し, そしてそれを, 諸商品の総計の交換価値についての三要素マクロ・モデルに拡大し, さらにそれを, ミクロ・レベルとマクロ・レベルとの双方において, 「すべての交換価値の三つの基本的な源泉であると同時にすべての収入の三つの基本的な源泉」としての三要素の分け前というタームでの分配問題についての彼の考え方を示すように拡大している, とされる。そしてさらにカウシルは, 商品の交換価値の源泉もしくは構成部分を分析するときにはスミスは明らかに三要素での説明を明確な形で表わしており, スミスの究極的な立場においては, 労働は「生産物」の唯一の基本的な源泉でもなければ交換価値の唯一の決定因でもないものであり, したがって, 『国富論』には二つの理論すなわち価値についての哲学的労働説 (the philosophical labor theory of value) と価値についての経験的三要素費用説 (the empirical three-factor cost theory of value) とが共存しているというヴィーザーや彼の追随者たちによる主張は支持しえない, とするのであった。(S. Kaushil, *ibid.*, pp. 63～66) また, (iii) の通常(自然) 価格からの現実(市場) 価格の乖離に関連して, カウシルは, 大旨, さきにみたテイラー, ボウレイらと類似したことを, 指摘している。すなわち, カウシルによれば, そこでは, 自然価格は, 商品が生産され市場にもたらされるときに支払われるべき三つの生産要素の費用価格として定義されており, 市場価格は, 市場で支払われる現実の価格として定義され, 「有効需要」と供給の相互作用によって決定される, とされており, そして自然価格と市場価格の同異およびその差異の程度は, 市場にお

ける供給に比較しての「有効需要」の大きさに依存するとされ、またそのさいスミスは有効需要関数の背後にある諸力としての稀少性、所得、効用に、また、供給関数の背後にある諸力に、気づいていた、とされる。そしてさらに、カウシルはつぎのことを指摘する。すなわち、スミスはもっぱら市場メカニズムの本質および作用についての考察をなすことを意図しはしなかったにもかかわらず、市場価格の自然価格への調節プロセスについてのスミスの分析は、競争市場メカニズムの機能についての彼の深い理解を示している、すなわち、費用によって決定される自然価格は、需要・供給によって決定される市場価格が「持続的に」引きつけられる「静止と持続の中心」と考えられており、これは、マーシャル流に言えば、長期安定均衡である。また、初歩的な水準のものであるとしても、商品市場と要素市場の相互依存についての明確な理解も存在する。つまり、その調節プロセスは、要素報酬にもとづく自然価格からの市場価格の乖離とその結果として生じる要素供給と生産物供給の需要への調節ということをつうじて引きおこされるものとして示されている、というのである。しかもカウシルによれば、以上のことのすべては、利己心、レッセフェールおよび競争の仮説的なフレームワークの中に織り込まれているのであった、つまり、スミスは、独占、政府の諸規制、不完全な知識、不完全な競争等々といった条件のもとで市場価格が自然価格と乖離したり調節プロセスが妨げられる事情を明らかにすることによって、これらの条件が存在しないとき、すなわち、完全競争とレッセフェールが一般化するとき、市場メカニズムは必然的に「静止と持続」という長期均衡をもたらすであろうということを示した、とされる。(S. Kaushil, *ibid.*, pp. 66~68.

28) W. J. Barber, *A History of Economic Thought*, Penguin Books, (1967) reprinted, 1970, p. 27.

29) すなわち、パーバによれば、スミスは経済価値の問題を取り扱うさい、まず、価値のパラドックスを示すことをつうじて「使用価値」と「交換価値」とを区別し、交換価値のみが経済的に関心をひくものとし、そしてこの経済価値の問題についての彼の研究のための三段階にわたる計画——(1)価値の「真の」尺度を確認すること、(2)価値の諸構成部分を分離すること、(3)「市場価格」の「自然価格」からの乖離を説明する諸要因を分析すること——を立てるのであるが、彼によれば、分析の目的についてのスミス自身のこの特性記述からして、スミスはほとんどの経済学者がこんにち適切なものであると考えるであろう諸問題からは幾分距離のある諸問題を提起していたということは容易にわかる、とされる。つまりこんにちの経済学者がある特定商品の「価値」を的確に述べることを求められるときには、普通、市場がその商品に対して支払おうとする価格を確定することによってすすもうとすることであろうけれども、これに対し、古典派の伝統のなかにある作家たちは、価格と価値はそれほど容易には互いに同一のものには帰されえないということを主張しよう

と骨を折っていた。「価値」は市場の気まぐれからは独立したものとみられていた。名目（あるいは市場）価格は変動するかもしれないしかし価値は一定不変に留まる、というのである。バーバは、スミスはこのような基本的な考え方にもとづいて価値についての彼の説明をなそうとした、とみるのである。W. J. Barker, *ibid.*, p. 30.

- 30) W. J. Barber, *ibid.*, pp. 30～31, 33, 35～37. なお、バーバによれば、スミスを含めて古典派の著作家たちは価値と価格とはそれほど容易には互いに同一のものには帰されえないということを主張しようと骨を折っていたとされるのであるが、バーバは、スミスにおける価値の確定に関してつぎのような説明をしている。すなわち、スミスは労働が「価値の尺度」であるとするのであるが、彼は一方で、商品の価値をその商品の生産に必要な労働量に基礎づかせる考えをもっていたが、これを、私的な土地の占有と資本の蓄積にさきだつ仮説的な「初期未開の」社会の状況にのみ適用することを選び、より複雑な制度上の設定を考察するときには、立場を変えた。つまりその場合には、価値はもはや単に直接労働投入のタームでは計算されえない。他の諸要素——特に土地と資本——が生産プロセスに貢献し、それらの要素の貢献はそれほど容易には労働単位には還元されえない。この点において、スミスは「労働含有量」という見解を放棄して、「労働に対する支配力」が価値の適切な尺度であると主張した、というのである。そしてバーバは、スミスの議論においては、このようにして確定される価値はスミスのいう「自然価格」に相等するものであり、そして、その「自然価格」は生産物の真の値うちを示すものとされており、そしてまたその「自然価格」は、賃金、地代、利潤の自然率という成分から合成されるものであり、またそれは、市場の競争諸力をつうじて現実の市場価格がそれに向って収斂する傾向をもつ「静止と持続の中心」とされており、そして、市場価格と自然価格についてのこの議論は、その副産物として、政府によるものであろうと個人的な利害によるものであろうと市場の行動を妨げるものはすべて社会的に非難されるべきものであって事物が市場の「見えざる手」に導かれることによってよりよい結果がもたらされるという主張の根拠を提供している、と把握している。W. J. Barber, *ibid.*, pp. 31～33

なお、「支配労働」尺度という考え方を中心にして展開されるスミスによる、長期間にわたっての全体としての経済的变化を測定するためのペースの追求に関する、バーバの説明については、W. J. Barber, *ibid.*, pp. 34ff. を見よ。

- 31) A. K. Das Gupta, 'Adam Smith on Value', *The Indian Economic Review*, The Delhi School of Economics, University of Delhi, vol. 5, no. 2, 1960, pp. 112～115.
- 32) A. K. Das Gupta, *ibid.*, pp. 105～106, 110. たとえば、ダース・グプタによれば、うえでいわれている価値の尺度としての労働は不効用を伴うものとしての労働

であり、「労苦と骨折り」というのは主観的なタームでの労働という概念を明瞭にするために使用された表現なのであって、「労苦と骨折り」という労働の不効用をもってスミス自身は価値についての一つの独立した説明としようとしたのではなく、それは、「支配労働」という基本的概念にとつての補助的なものである、とされる。(A. K. Das Gupta, *ibid.*, pp. 107~108)

また、ダース・グプタによれば、スミスのいういわゆる「初期未開の社会状態」においては、鹿とビーバーの例に示されているように、商品の価値はその商品の生産に投入された労働量によって直接的に測定されることができ、そこでは、市場においてその商品によって支配される労働量とその商品に体现された労働量は等しくなるけれども、このケースについてのスミスの論述においては、「労働費用」(labour cost) と「労働支配」(labour command) とは二つの独立したアプローチであるのではなく、一方つまり「労働費用」は地代も利潤も存在しない社会という特殊な状況での他方つまり「労働支配」からの派生物なのであり、したがって、交換価値は相対的労働費用によって支配されるという意味での労働価値説に類似したものに対してスミスが、直接的に、主唱者としての責任を有すると考えるのは誤っている、とされる。(A. K. Das Gupta, *ibid.*, p. 108 n. 8.)

さらに、ダース・グプタは、スミスの生産費アプローチでさえ、ある限られた意味では一つの理論とみなされるけれども、一つの社会的範疇としての価値を説明するよう意図されてはいなかった、とする。すなわち、ダース・グプタによれば、多くの人々はこの生産費に関するスミスの議論を、スミスが与えた価値理論と考えようとしてきた。また、確かに、F. フォン・ヴィーザーからシュムペーターに到るスミスの諸解釈者たちの多くの人々がそうしたように、「生産費」に独立的な地位を与え、そしてそれを、スミスが「自然価格」と呼ぶものと結びつけてもよいかもしれない。だが、生産費は、ある限られたコンテクストにおいてのみ、つまり、賃金、地代、利潤という費用の諸構成要素が独立の^{データ}条件と見なされうるといったコンテクストにおいてのみ、価値を説明するものと考えられうるだけである。ところで、スミス自身はこのような限定的な範囲をこえてその「理論」の適用を拡大しようとしていなかったのではないかと思える。スミスがここで言及しているのは明らかに、まさしく一人の個別的な生産者あるいは一つの個別的な商品なのである。また、スミスが商品市場および要素市場をつうじて作用する費用—価格均衡という現象に気づいていたということを認めるとしても、その理論を、しばしばなされるように、一般均衡を包含するものとして解釈することは、幾分根拠のないことであろう。「生産費」を、価値現象の説明そのものを試みるもの——およそ価値「理論」とはそのようなものであるべきである——としてよりも、むしろ、労働尺度にとつての補助的なもの、つまり、労働尺度に到達するための媒介物として、スミスの体系において役立っていると解釈することが可能である（この間の事情については、中川

栄治『『国富論』における価値論の位置に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——』『広島経済大学経済研究論集』第1巻第3号, 1978年12月, 114ページ脚注24, A. K. Das Gupta, *ibid.*, pp. 108~110 (見よ。『国富論』のなかの全価値分析における動機は、尺度の発見ということなのである、とされるのである。(A. K. Das Gupta, *ibid.*, pp. 110~111)

Ⅳ

以上でみてきた諸見解の多くは、スミスの価値・価格分析を価値尺度に関する議論と価値・価格の決定に関する議論とに分けて把握するものであったが、A. S. スキナーは、1970年の彼が編集した『国富論』への序文において、スミスの議論を、価値論に関する議論と価格とその決定因に関する議論からなるものとして把握し、前者の主要な部分は『国富論』第1編第5、第6章に、後者の主要な部分は第6、第7章にみられるとしている。ところで、スキナーによれば、価値論に関するスミスの議論は、異なるものではあるが関連のある二つの問題を取り扱う。第一の問題は財貨の間の交換比率の決定因に関するものであり、この問題はさらに、価値と有用性に関する議論と、価値と生産に要する費用に関する議論に分れる³³⁾。第二の問題は、財貨の総ストックの価値の測定また財貨の交換において使用する手段に関するものである。第一の問題は、主に、一個人が交換をつうじて他財貨の特定単位を獲得するために一財貨の数単位を手放そうと思うその比率を決定するであろう諸要素についてのものであり、これは交換価値の問題を考察する一つの方法であるが、スミスは交換価値の問題を、それ自体として取り扱ったのではなくて、個人が生産した彼が交換において使用するところの財貨の総ストックの価値を支配する諸要因を明らかにすることの手段として、論じたのであり、第二の問題についての議論はこのことを取り扱うものである、とされるのである。他方、スキナーによれば、³⁴⁾スミスは賃金、地代および利潤を社会の三「大構成階級」に支払われる収入の典型とみなし、また、三つの生産要素の使用に対して支払われる価格とみなしていた。かくして、社会における諸個人や諸グループが受け取

り、そしてそれによってこれらの諸個人や諸グループが諸商品を購買することを可能にするこの収入は、諸商品を生産する人々が負担する費用であるようにみえるのであり、そしてこの議論が、価格とその決定因という問題を提出することとなる、とされるのであった。³⁵⁾

33) これらの問題についてのスミスの議論をスキナーは、大旨、つぎのように説明している。すなわち、価値と有用性との間に存在する関係は、スミスが水とダイヤモンドのいわゆる価値のパラドックスを取り扱うさいに明らかになるものである。そして、この価値のパラドックスの解決は、何故にそのような二つの財貨がなんらかの価値をもつのかということに関する説明と、何故にこの二つの財貨が異なる価値をもつのかということに関する説明といった二つの段階に分けて述べられうる(なお、スキナーによれば、第一の段階の問題に関して、スミスは、価値を効用の関数、いいかえれば広い意味での「有用性」の関数とみなしていたとされ、また、第二の段階の問題についての説明をスミスはここでは留保していたけれども、事実上、値うち<価値>は稀少性の関数であるという解答を示していた、とされる。)のであるが、スミスはこの価値と有用性との関係について議論をすすめた後、価値と生産に要する費用に関する議論に入る。すなわち、個人がある財貨を他の財貨と交換するその比率は、獲得される財貨の効用によってだけでなく交換される財貨の生産に伴う「労苦と骨折り」によっても影響されるとすることによって、交換比率の問題に第二の主要な要素を導入したのである。これに関連してスミスは、交換手段(物々交換のさいには財貨)を獲得するさいには個人は「労働という労苦」を経験しなければならない、したがってまた、「自分の安楽、自分の自由、自分の幸福の一部」を「放棄」しなければならないということを認めていたのであり、彼は、交換比率を扱うさい、問題のこの側面に最大の力点を置いた。スミスは、物々交換の経済においては「さまざまな物を獲得するために必要な労働量の間の割合が、これらの物を互いに交換するための規^{ルール}準となりうる唯一の事情であったように思われる」(W. N., p. 47, 大河内訳< I >80ページ。)ということを主張し、後で異質労働の問題も指摘するのであるが、もし一匹のビーバーを仕留めるのに一頭の鹿を仕留めるのに要する労働の二倍を要するならば、「ビーバー一匹は当然、鹿二頭と交換されるであらう」(W. N., p. 47. 大河内訳< I >80ページ。)と述べた。当該の効用および不効用の割合が各々の狩猟家にとって同一であるときにのみうえで述べられている交換比率が一般に行なわれうるのだということは、価値と有用性についての議論からも明らかであろうけれども、スミスは分析を、ここで放置してしまった。A. S. Skinner, 'Introduction' to the *Wealth of Nations*, Penguin Books, 1970, pp. 47~49. 川島信義・小柳公洋・関源太郎訳『アダム・スミス社会科学体系序説』, 未来社, 1977年,

100～105ページ。

- 34) この問題についてのスミスの議論をスキナーは、大旨、つぎのように把握している。すなわち、問題をこのような方向で考察したスミスは、個人が生産した交換において処分しなければならない財貨（事実上、彼の所得）の真実価値は、彼が支配することができる、しかも、すべての（個々の）交換がいったん行なわれた後に彼が現に受け取る、財貨の量（労働単位で示された）によって測定されなければならない、とする。ところで、原始的な物々交換の経済においては財貨と財貨が交換されるのに対して、近代の経済においては、財貨はまず一定額の貨幣と交換され、そしてその後に、その貨幣が他の財貨を購入するために支出される。そのような事情のもとでは、個人は、（労働という「労苦」に耐えた見返りとして受け取った）彼の収入の価値を、彼の所得を支出することによって彼が獲得しうる財貨の量というタームでよりもむしろ貨幣のタームで評価しがちである。これに対して、スミスは、厚生の真の尺度（すなわち、我々の欲望を満足させる我々の能力）は、貨幣よりもむしろ「貨幣の値うち」の中に見出されるべきであり、そしてその「貨幣の値うち」は、諸個人もしくは諸グループが購買しうる生産物の量（「支配」労働）によって決定される、とし、そしてこれを根拠にして、スミスはさらに、近代における（貨幣）収入の三つの「基本的な源泉」が、賃金、地代および利潤であるとすれば、それらの各々の真実価値は、究極的には、「そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって」測定されなければならない、ということを描きつつ、所得の名目価値と真実価値とを区別することへとすすんだのであった。実質所得と貨幣所得との区別を確立するとともに、スミスはさらにまた、いかなる一つの時点においても異時点間においても所得の真実価値を確定しうるような唯一の安定的な基礎として、労働単位（不効用のタームでの労働単位）を弁護しようとし、価値の絶対的尺度の（たぶん無駄な）追求を行なうのであった。A. S. Skinner, *ibid.*, pp. 49～51. 邦訳105～109ページ。なお、このような価値尺度についてのスミスの考察に関するスキナーの説明については、A. S. Skinner, *ibid.* pp. 90～91 n. 28. 邦訳112～113ページ注(28)を見よ。
- 35) A. S. Skinner, *ibid.*, p. 52. 邦訳113～114ページ。なお、第6, 第7章でのスミスの議論に関してスキナーはつぎのような指摘を示している。すなわち、「おそらく注目に値するのは、これらの章で、スミスが労働価値説を『原始』状態に限定したあと、つづけて価値の「生産費」説を述べた、と一般に考えられているということであろう。ある意味で、このような考えがまったく正しいことはもちろんである。たとえ、交換比率についての議論は、価格理論の取り扱いと無関係でないということが認められうるとしても。それというのも、少なくとも、価値と効用との間に確証されるつながりは、需要の問題に関係しているし、他方、労働には仕事の不効用を補償するための報酬が必要であるという見解は、供給価格の問題につながって

るという、そういう広い意味においてはあるが。」(A. S. Skinner, *ibid.*, p. 91 n. 30. 邦訳125～126ページ注(30)。

なお、価格とその決定因についてのスミスの議論に関しては、スキナーは、大旨、さきにみたテイラーらと類似した把握をしているのであるが、そのさいスキナーは、つぎのようなことを指摘している。すなわち、スミスはこの問題を取り扱うさい、賃金、利潤、地代の所与の「通常」率あるいは「平均」率というものの存在を仮定している。その「通常」率あるいは「平均」率とは、ある所与の社会あるいは近隣の地域内で、ある所与の期間（一年）に、広くゆきわたっているとわれうるような率のことである。この仮定は、かなりの重要性をもっているが、それは二つの主要な理由からである。まず第一に、この仮定が示していることは、スミスが価格の問題を取り扱ったさい、彼は一つの静学的体系という分析装置を暗黙のうちに用いており、そして、ある所与の（安定的な）生産要素ストックと、それらの要素に対するある所与の（安定的な）総需要水準といった観点から、研究を進めていた、ということである。（分配論に関する議論は第8章から第11章にみられるけれども、この仮定は、第7章のはじめてのところで述べられている。）第二に、ある所与の（安定的な）収入率が仮定されていることが重要なのは、これらの収入率が、諸商品の供給価格に影響を与える率であり、しかも個々の売手がそれを全く制御する力をもたない率であるという理由からである。彼の主要な前提を形成するこれら二点をもって、スミスは、価格の諸決定因の検討へとすすみ、そして、異なっているが関係のある二つの問題を含んでいると思える議論を、提出した。すなわち、第一に、スミスは、特定の諸商品の価格を決定する諸力の説明に着手し、その説明の過程で、部分均衡の性質を明らかにした。第二に、スミスは、その分析を、一般均衡の現象を説明する一手段として、したがってまた、ある（所与の）生産要素ストックがさまざまな用途あるいは仕事の間に配分されるその仕方を決定する諸力を説明する一手段として、用いたのであった。A. S. Skinner, *ibid.*, pp. 52～53, p. 97 n. 3. 邦訳114～115ページ、126ページ注(31)。

V

他方、一般に『国富論』での価値論の部分とされている個所のうち第1編第5章と第7章は、本質的には、第1編第1章から第3章の分業論で展開されている生産理論のつづきであるという見解が、V.W.ブライドンによって、1938年の論文で、示されている。³⁶⁾すなわち、ブライドンによれば、価値問題に対する論究計画についての本稿の序でみたスミスの言葉をその

言葉どうりに受け取れば、第5章は交換価値についての所論の一部分ということになる。だが、第11章の諸部分とともに第5章を研究すれば、それが全く別の事柄を取り扱っていることがわかる。そこには二つの目的があるのであって、一つは、貨幣のヴェールを^{リアル}実質的なプロセスにまで、つまり、人々は働きそして他人の所産を支配しているという^{リアル}実質的なプロセスにまで引きおろすこと、もう一つは、財貨の生産の難易の尺度、「^{リアル・コスト}実質費用」の変化の尺度を、見出すことである、とされる。そしてブライドンは、^{リアル・プライス³⁷⁾}スミスは第5章において「^{リアル・プライス³⁷⁾}真実価格」の理論を展開することによってこれらの目的を達成しようとし、そしてその理論を第11章で使用した、とするのであった。³⁸⁾そしてまた、ブライドンは、本稿脚注36)でみたように、第7章を生産理論の本質的部分をなすものとするのであるが、そのさい彼は、この章は現代的な意味でのスミスの「価値理論」を含むものとして、³⁹⁾把握している。

ブライドンは、1974年の著書においても、スミスの「真実価格」概念についての彼の把握にもとづいて、『国富論』第1編第5章は交換価値の決定を取り扱っているのではないとし、そこでは、生産性の変化、生産性の一般的向上に応じての、特定財貨の「真実価格」、「人・時価格」(⁴⁰⁾“man-time price”)の変化の測定ということが取り扱われているのだ、としている。他方、ブライドンは、この著書では、第6章で展開される「初期未開の社会状態」というモデルは、我々が単純モデルと呼ぶもの、価格システムの社会的機能や長期均衡の本質への最初の導入として使用される「仮説的な手工業者モデル」にすぎないとし、そして、スミスはこのようなモデルからすみやかに、資本の利潤、土地の地代の存在する彼の現実の世界へと移り、単純な労働(価値)説から離脱して、第7章において自然価格の生産⁴¹⁾費説へと移った、としている。

36) すなわち、ブライドンによれば、『国富論』第1編第5章と、第11章の大部分は、^{リアル・プライス}事物の「真実価格」を議論し、そしてそれらは、第1編第1章から第3章の分業論

で展開された生産理論のつづきであり、それらは「労働の生産諸力における改善」とかわり合うものである、とされる。そしてさらに、第7章もまた、生産理論の本質的部分をなす、とされる。なぜなら、そこでの(また『国富論』をつうじての)主要な関心は、生産の適正な方向ということに関するものであり、スミスの関心は、諸価値がなぜそうであるのかということよりもむしろ、最善の資源配分はどのようなものであるか、ということにあるからである。そして、このような意味で第7章での価値理論は、レッスフェール弁護論の本質的な部分をなすのであり、このことは第7章とともに第4編が読まれれば明らかである、とされる。V. W. Bladen, 'Adam Smith on Value' in *Essays in Political Economy in Honour of E. J. Urwick*, edited by H. A. Innis, Toronto, 1938, pp. 28~29.

37) なお、ブライドンによれば、スミスは「価値」という用語を多数の意味で使用し、ときとしてこの「真実価格」を表わすためにも使用しているのであるが、スミスの議論においては、「真実価格」は「交換価値」あるいは単に「価値」とは別個の概念である、とされる。スミスの「真実価格」概念についてのブライドンの把握については、中川栄治「アダム・スミスの価値論における諸価値および真実価格：語法に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——」『広島経済大学経済研究論集』第1巻第4号、1979年3月、238~240ページも見よ。

38) V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 29~40. なお、ブライドンは、この「真実価格」についてのスミスの議論を、大旨、以下のように説明している。すなわち、第5章では、スミスは、「価値」ではなく「真実価格」を議論していたのであり、事物一般および特定の事物がより容易に獲得することができるようになっていくという歴史的な問題を取り扱っていたのであった。スミスは、事物の「真実価格」を、「それを獲得するための労苦と骨折り」と定義する。そしてスミスは、この「真実価格」についての考察において、財貨を獲得することの難易の程度の検査手段として労働の継続期間を弁護する。ところで、社会全体の観点からすれば、あるいは、なんらかの孤立した自給自足的な小自作農の観点からすれば、「それを獲得するための労苦と骨折り」としての事物の「真実価格」という概念は、簡単でかつ合理的な概念である。しかしながら、その概念を、分業が大いに進展したほとんどの生産が販売のためであって直接的な使用のためでないといった社会での諸個人に適用することには、困難が存在する。そこでスミスは「支配労働量」に関心を向けた。ある事物の「真実価格」とその「支配労働量」との間の関係は、なんらかの注意をもって検討されてはいないけれども、スミスは、諸商品の「真実価格」における変化は同一方向でのまたほぼ同一の大きさでの、「支配労働量」における変化を産み出すということを、仮定していた。また、なんらかの一つの商品を生産するさいにおける効率の改善は、そ

の商品を自分自身の肉体の労苦によって直接的に購買する人々にとってだけでなく、その商品を貨幣で購買する人々にとっても、その商品を安価にするであろうということ、を、仮定していた。そしてまたこの結果が到達されるメカニズム(すなわち、「獲得することが」より容易な品物は、より豊富になるであろう、そして、もし需要が同じほどの速さで増加しないならば、価格は低下する、というメカニズム)をスミスは理解していた。ところで、スミスは「真実価格」の議論において、長期間にわたっての「実質費用^{リアル・コスト}」の変動に関心を抱いていたわけであるが、なんらかの商品の生産に伴う「労苦と骨折り」の量を直接的に測定することの困難性に直面して、スミスは、長期間にわたって不変の「真実価格」を保持してきたかあるいは不変の労働量を支配してきたか、あるいはそれら両方の性質をそなえてきた商品を、探し求めた。そしてスミスは、そのような商品として、銀を却下し、経験の根拠から、また、二つの理論的根拠から(これらの根拠については、V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 36~37 を見よ。)、穀物を選んだのであった。なお、ブライドンによれば、変動する真実価格の尺度として穀物をスミスが選んだことに対する理論的な根拠は非常に薄弱なものであるとされ、そしてさらに、たぶん真にやっかいなことは、真実価格の尺度といったものは存在しないということである、とされる。V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 30~37.

また、ブライドンは、第11章の大きな部分を占める「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」では、価値という言葉が「真実価格」と同じものとして使用され、そして、銀の「穀物」価格での変化が、その「真実価格」における変化を測定するものと考えられており、そしてそこではスミスは一般的な購買力という近代的な意味で、貨幣価値の変化を議論していたのであり、そこでの彼の問題は指数問題なのであった、とし、この「余論」でのスミスの議論をさらに検討している。V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 37~40.

- 39) すなわち、ブライドンによれば、スミスは第7章において「自然価格および市場価格」の理論を概説したのであるが、この「自然価格および市場価格」の理論は現代的な意味でのスミスの「価値理論」であるとされ、それは、非常に現代的な性格をもった、短期の「市場」価格および長期の正常価格つまり「自然」価格の理論を含んでいる、とされる。そしてそれに関連して、ブライドンは、スミスは価値のパラドックスを看破しはしなかったけれども、そのことは彼の理論に影響を与えずに、価格の決定における需要の役割は正しく述べられている、とし、そしてさらに、第7章での議論のなかで使用されている生産費は選択的な機会というタームでも解釈されうるということを指摘し、また、スミスが示しているような生産費説は、供給が変化しても費用が一定と仮定できるかぎりでの、競争という条件のもとでの「特殊均衡」についての説明としては満足のなものであるとともに、スミスのこの

理論は欠陥を含みながらも（それについては、V. W. Bladen, *ibid.*, p. 42 を見よ。）、各々の生産要素の様々な選択的諸用途における各々の生産要素の稼得の均等という条件に注意を向けることによって、「一般均衡」への導入を提供している、ということを指摘している。V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 40～42.

- 40) ブライドンによれば、結局のところスミスの主題は諸国民の富についての考察とすることであった。そしてその富は生産性の向上につれて増加するのであり、かくして変化する生産性を考察することが必要となり、生産性の変化の測定という問題に出くわすこととなった。そして、スミスは、生産性の裏面である真実価格というタームで、問題を言い表わしたのであった。スミスは生産性よりもむしろ「安価」つまり真実価格の低さについて語ったのであるが、これは同じ問題を攻究するもう一つの方法にすぎない。ヘミスは、それについての彼の説明は満足的なものからはほど遠かったけれども、測定という手ごわい問題に立ち向っていたのであり、ここでは、長期間にわたっての真実価格の変化、そのような変化の測定という問題を取り扱っていたのである。このことは、第5章だけでなく第11章での特定の諸商品の真実価格の変化についての考察をみればより明らかになる、とされる。V. W. Bladen, *From Smith to Maynard Keynes: The Heritage of Political Economy*, Toronto and Buffalo, 1974, p. 20. なお、真実価格の変化、そのような変化の測定ということにまつわる諸問題、たとえば、異質労働の問題、貨幣、支配労働、穀物等に関するスミスの議論についてのこの著書でのブライドンの説明については、V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 21ff を見よ。

- 41) そしてブライドンは、さきにみた1938年の論文におけるのと同じように、「有効需要」という概念を導入して市場価格、自然価格が議論される第7章でのスミスの理論を、単なる価格理論ではなく、資源配分の理論さらに彼のレッセフェール弁護論の一つの主要要素でもあるとする。そして、ブライドンは、スミスが「偶然の出来事」や諸障害のいくつかを確認するという形で彼の生産費説に対する補足、修正をなした、とするのであった。V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 25～30.

結びに代えて

以上、『国富論』においてアダム・スミスが彼の価値・価格分析を展開しているとされる個所において、彼がどのような問題を、どのように扱っているか、ということに関して、この問題に直接的にあるいは間接的に言及している主に今世紀に入ってから海外において発表された諸見解をみてきた。

以下では、それらの諸見解の特徴、関連等に関して若干の点を指摘しておくこととする。

1：イングラム、リイブクネヒト、また結果的にはホイッテーカーも、スミスは使用価値と交換価値のうち交換価値を研究対象とし、そしてこの交換価値の研究を「価値尺度」と「価値規定」という二つの問題にわたって行ない、さらに「価値規定」に関して、いわゆる「初期未開の社会状態」については投下労働価値説を、「進歩した社会」については生産費説を提示した、と把握しているわけであるが、このような把握は、スミスの価値・価格分析についての把握の一つの典型となっているものである、といえる。

2：ロールによる把握は、Ⅲでみられた諸見解と比較すると、それらの間には著しい相違があるといえる。(1)第5章に関して……ロールは、第5章でスミスは価値の起源とその尺度に関して支配労働と投下労働との間で混乱していた、とみている。それに対してⅢでみたボウレイ、ウエスト、ブローグ、オブライアン、カウシルらは、第5章は価値の原因、決定の問題とは別個のものとしての価値の測定、価値尺度の問題に関する議論であるとし、さらにボウレイは、スミスは価値の基礎、価値測定の基礎としての投入実体にはことさら関心を抱いていなかった、としている。(2)第6章に関して……第6章では商品価値の分解、商品価値の所得分配への関連、交換価値の源泉としての賃金・利潤・地代、生産費説等が提示されているとする点では、ロールはボウレイ、カウシルと共通するのであるが、投下労働価値説の取り扱いにおいて、相違が存在する。すなわち、ロールは、どちらかという、スミスは投下労働価値説を放棄せざるをえなかったという形でとらえている。これに対し、ボウレイ、(ブローグ)、(ウエスト)は、むしろ、第6章は投下労働価値説への反駁が意図されているのだ、とする。さらに、たとえばダース・グプタはもともとスミスには投下労働価値説はなかったのだという見解さえ示している。(3)第7章に関して……第7章では市場価格、自然価格に関する諸問題が取り扱われているとする点では一致するのであるが、Ⅲでみられた見解の多くにおいては、第7章

はスミスの議論の重要な部分とみなされ、その議論のいわゆる近代経済学的側面が強調されるのに対して、ロールの見解にはそのような傾向はみうけられない。以上のような相違は、スミスの価値・価格論を、リカード＝マルクスの線に沿ってみる見方と、いわゆる近代経済学の観点からとらえようとする見方との相違のあらわれの一つの典型と考えることができる。

3 : (1)Ⅲでみた諸見解にはつぎのような共通点がある。㉑それらはいわゆる近代経済学の視点からスミスの議論をとらえたものである。㉒それらの多くのものは、スミスの価値・価格分析は、価値尺度に関係する部分と価値・価格の決定に関係する部分からなる、としている。㉓それらは、スミスの議論においては価値の不変の尺度は、不効用を伴うものとしての労働に対する支配に、求められている、とみている。㉔それらの多くのものは、スミスは投下労働価値説を主張したのではなく、価値の生産費説を主張したのだ、としている。㉕それらの多くのものは第7章でのスミスの議論の近代経済学的側面を強調し、そしてあるものは、そこに見出されるとされる価格メカニズムをつうじての均衡、資源配分の考え方をスミスの経済的自由主義の主張と結びつけている。(2)Ⅲでみた諸見解の間には、価値尺度としての支配労働をもってスミスが何を取り扱おうとしたのかということやその他スミスの価値尺度に関する議論に関しては、若干の相違が見出される。(3)それらの諸見解のなかには、価値・価格分析におけるスミスの主要な関心は価値尺度に関するものであった、という見解もある。

4 : (1)スキナーの見解も近代経済学の視点からのものといえるであろうが、スミスの議論の構造の把握の仕方において、それまでにみてきた諸見解と異なる。そして、交換比率の議論を効用の側面から把握しようとしている。これは、たとえば、ボウレイの1974年の著書の chap., IV. (i) 等々とともに、スミスの議論における「使用価値」、「効用」の問題への注意を喚起するものである。(2)不変の価値尺度としての支配労働についてはⅢでみた諸見解の多くのものと同様の把握をしている。また、価格とその決定因に関する議論の近代経済学的側面を指摘する点に関しても、Ⅲでみた諸

見解の多くと一致している。

5 : (1)ブライドンも近代経済学の視点からスミスの議論をみているといえるが、スミスの「真実価格」概念についての彼の把握にもとづく第5章の把握は、それまでにみられた諸見解と比べてかなり特徴的なものである。(2)他方、第7章についての把握は、Ⅲの諸見解の多くのものやⅣのスキナーの把握と共通するところが多い。